第 70 回加藤周一文庫公開講読会
2026 年 7 月 4 日

『続羊の歌』「死別」について（前半）

福井　優*

I.　概要

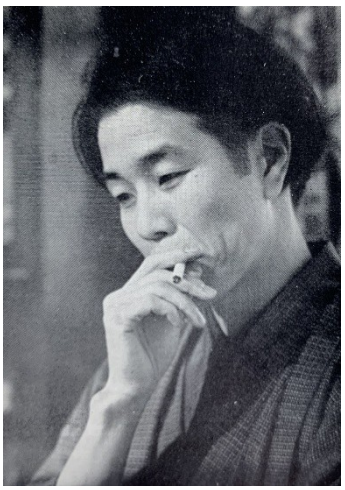
（1）書誌情報

→加藤周一「死別」『続　羊の歌――わが回想』（岩波新書、1968 年）改 224～236 頁

→初出：加藤周一（宇野亜喜良・え）「連載小説　続 羊の歌 19――死別」（『朝日ジャーナル』1967 年 12 月 10 日号）114～118 頁

（2）本章の主題

本章の「死別」と次章の「審議未了」とは対を成しており、共に 1960 年の加藤周一（1919～2008 年）の経験が描かれる。次章が 1960 年 5～6 月に盛り上がりの頂点を迎えた安保闘争と加藤との関わりが示されるの対し、本章はそのような政治的激動の最中における「ひとりの友人」（＝原田義人）との「死別」が綴られる。



原田義人（渡辺尚幸撮影、『反神話の季節』より）

加藤にとって、20 年来の親しい友人であった原田の早逝は衝撃的な出来事であった。本章では、加藤が原田の死を通じて、自身の来し方行く末を見つめ直し、そして、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学という新天地へと飛び立つまでが描かれる。

本章では、主に以下のような話題が展開する。加藤は、体調不良を抱えているにも関わらず、頑なに病院で診察を受けようとしない原田を説得し入院させたのだが、原田はまもなくこの世を去る。加藤は原田の死後、「私は彼をほんとうに識っていたのだろうか」という疑問を抱くようになり、その思いはいよいよ強くなっていく。そして、しばらくして原田が「みずから死を望んでいたのではなかったか」という考えに至り、「彼の大きな部分は、私の理解の外にあると思った」という。しかし、加藤は原田と自身のこれまでの軌跡を重ね合わせながら、人生の大きな転機を予感しつつ、同じような立場であったはずの原田がその矢先にいなくなったことに深い悲しみと痛恨を覚える。

さらに加藤は過去に原田が、妻子がありながら欧洲で出会ったひとりの女性を深く愛するようになり、そして、その女性との愛を断念したのではないかと空想する。その一方で、加藤は病院に原田を訪ねた後に遭遇した「安保反対」の看板を担ぐ学生たちの隊伍に、奇妙にも戦時下の「学徒出陣」の光景を想起してしまう。また、その隊伍の列にも加われず、学生たちの犠牲を防ぐこともできない自分自身に対し、癌に対してと同じような惨めな無力感に苛まれ、「傍観者として育った私は、遂に傍観者として終るほかないのか」という思いを抱く。そうして、原田の死が「私のなかで何ものかを変えていた」という加藤は、東京を離れることを決意するのである。

* 立命館大学衣笠総合研究機構間文化現象学研究センター客員協力研究員。

II.　解説

第 1 段落

ひとりの友人が死ぬ。すると私には、周囲の人々が彼の死について何を考えているのか解らなくなった。人々は集り、涙を流し、葬式の相談をしたり、冗談をいったり、かたくなに沈黙したりしていた。その男の母親はいった、「この子は結婚したときから、私にはもう無いようなものでございました……」。彼の妻君の母親はいった、「稼ぐことをちっとも考えない人でして、家族のことを少しでも心にかけてくれましたらねえ……」。親しかった友人の一人は、誰にともなく呟いていた、「ぼくは彼に対して怒っているのだ、自分の苦しみをひとりで背負って、われわれには決して知らせてくれなかった……」。別の友人は、この際、葬儀委員長というものが必要であり、それにはあの男では役にたたず、この男ならば手際よくゆくだろう、ということを熱心に論じていた。私は、すじ書きを知らない芝居の舞台に、途中からまぎれこんだような気がした。気心の知れぬ人々のなかで、無益に自分の役割を探す……しかしそのとき私の周囲にいたのは、ながい間の友だちや、友だちの知り人ばかりで、それ以上に気心の知れた仲間はないはずであった。（197～198 頁、改 224～225 頁）

（1）「ひとりの友人が死ぬ」

①ドイツ文学者・原田義人[1]

1918 年	8 月 5 日、東京市本郷区駒込に出生
1925 年	4 月、滝ノ川第三尋常小学校に入学
1931 年	4 月、東京府立第五中学校に入学
1937 年	4 月、第一高等学校文科乙類に入学
1940 年	4 月、東京帝国大学文学部ドイツ文学科に入学（～1942 年 9 月）
	府立五中で同期の加藤道夫や鳴海四郎、鬼頭哲人、芥川比呂志らと新演劇研究会を結成
1942 年	10 月、応召
1945 年	8 月、復員。その後も大学の独文研究室に残り東京大学文学部副手、文学部大学院特別研究生になる
1947 年	10 月、野島蘭子と結婚。翌年 10 月に長女・明絵が誕生
1948 年	7 月、マチネ・ポエティクの同人雑誌『方舟』（河出書房）の創刊に参加
1950 年	4 月、東京大学教養学部助教授
1954 年	4 月、ハンブルク大学日本語講師として渡独、ヨーロッパ各地を歴訪（～1956 年 1 月）
1958 年	9 月、ゴットフリート・ベン著、原田訳『二重生活』（紀伊國屋書店）を刊行
	10 月、季刊文芸誌『聲』（丸善）の海外文学ドイツ欄を担当
1960 年	7 月、東京大学教養学部教授
	8 月 1 日午前 7 時、国立東京第一病院で癌性腹膜炎のため死去、41 歳
	8 月 3 日午後 1～2 時、東京都杉並区馬橋の原田宅において自由葬が執り行われた
1961 年	4 月、遺稿集『反神話の季節』（白水社）を刊行

[1] 以下の年譜は「原田義人年譜」「原田義人主要著書、訳書」（原田『反神話の季節』白水社、1961 年）、小久保実「原田義人」（『日本近代文学大事典』）、「原田義人氏」（『毎日新聞』1960 年 8 月 1 日付夕刊、7 面）を基に作成した。

②原田と加藤周一との交友

→「戯画」(『羊の歌』)

「後に私は同じ高等学校の学生であった原田義人や中村真一郎と、〔片山敏彦教授の〕その荻窪の家を訪ねた。」(129 頁)

→「青春」(『羊の歌』)

「赤堤の家には、何人かの友人たちが、いわば類をもって集ることがあった。〔……〕独文科の学生であった原田義人も、ドイツ語の詩文ばかりでなく、フランスの象徴派の詩人たちに関心をもっていた。」(191 頁)

「原田と中西〔哲吉〕の二人は、陸軍に召集された。原田はやがて幹部候補生となり、軍刀を提げて私たちのまえにもあらわれたことがある。「立派な軍人だね、板についているな」と中村がいい、「ひやかすなよ、人の気も知らないで」と原田はいった。しかし原田の軍服は、たしかに私の眼にも板についているようにみえた。中西は幹部候補生を志願しなかった。兵営からはしばらくの間家族あてに手紙が来ていたが、やがて、輸送船に乗せられて南方へ送られるらしい、という報らせを最後として、その後の通信は絶えた。原田は戦後帰ってきたが、中西はふたたび還らなかった。」(194 頁)

→「外からみた日本」(『続羊の歌』)

「原田はハムブルクの大学で日本語の講師をしていたことがあり、彼にはそこでも会ったし、パリでも会った。東京には私よりも先に帰って、駒場の大学でドイツ語を教えていた。「戦後の改革に対する反動というか、逆もどりの傾向は、いろいろの面に出て来ていると思う」と彼はいった。それは私たちがヨーロッパでも話しあっていたことであった。」(改 195 頁)

→原田は敗戦直後、マチネ・ポエティクの同人雑誌『方舟』の編集長として活躍。「編集同人」に森有正 (1911～76 年)、福永武彦 (1918～79 年)、白井健三郎 (1917～98 年)、矢内原伊作 (1918～89 年)、窪田啓作 (1920～2011 年)、加藤周一、中村真一郎 (1918～97 年)。『方舟』は 1948 年 7 月に創刊されるも、同年 9 月の第 2 号を以て終刊[2]。「原田は編集長として、同人連中に原稿を催促したり、刊行もとの河出書房の杉森久英と渡り合ったりするだけでなく、やがて私たち仲間全体の生活の世話役となって行った」[3]

→原田は加藤論も執筆している。「加藤周一における西洋と日本」(『新選現代日本文学全集　第 34』筑摩書房、1959 年)

(2) 原田歿後の「周囲の人々」の反応――ふたりの母

→「原田自身も父や母その他家族関係のことは、エッセイでも示さなかった」[4]。原田が自身の母親とも、また妻の母親とも距離のあったことが暗示される

---

[2] 中村真一郎『戦後文学の回想』(筑摩叢書、1963 年) 119～224 頁、192～194 頁。

[3] 中村真一郎「自伝抄　わが点鬼簿＜9＞　異色の人、原田義人」(『読売新聞』1981 年 5 月 23 日付夕刊) 5 面。
加藤文庫には『方舟』の編集長としての働きぶりが窺われる原田の来信が残されている (資料番号 L02717)。また、1950 年代半ばのドイツからの原田の来信も所蔵されている (資料番号 L01197、L01296、L01990) (『立命館大学図書館加藤周一文庫所蔵書簡目録』立命館大学衣笠総合研究機構加藤周一現代思想研究センター、2025 年)。

[4] 紅野敏郎「「學鐙」を読む (165) ――原田義人」(『學鐙』2002 年 12 月号) 32 頁。

断の残酷さ

知の窓味で印象の深かったのはベルリンである。

もともとオペラというものは、劇場内で上演すべきものであるのに、これが野外にも出されたの

加藤周一が第二回アジア・アフリカ作家会議に出るため、ソ連内のタシケントへ行く。はずかしいなどの町とこにあるのか知らないが、

天山山脈を越えて

あった。古風にいえば、天山山脈を越えることになる。箱根の山を越えるのもおっくうな私は、気が遠くなる思いだ。

加藤の目、あの活眼そのものが、気が遠くなるようなものだ。三井鉱山の診療所医（博士号は血液学でとった）、明大のフランス語の先生、芸術や文学から国際関係に及ぶ多面的な評論活動。そして最近も三作目の長編小説「神学祭」を書いた。どうみても非凡な人である。

加藤は英仏独の各国語で自分の思想を自由に表明できるし、それより百本古来の芸術と文学に通じ、それを愛している。今度の会議のような場合、申分がない。長いヨーロッパ滞在の成果はすばらしかったが、新しい見聞の実りも、折るまでもないだろう。心の温かい友人がしばらく日本を離れることだけが、私には少しさびしい。

原田 義人

今週の顔

加藤 周一（かとう しゅういち）
（作家・評論家）

原田義人「今週の顔　加藤周一　天山山脈を越えて」（『読売新聞』1958 年 8 月 4 日付夕刊、3 面）

（3）原田歿後の「周囲の人々」の反応――ふたりの友人

→白井健三郎（1960 年 8 月 4 日執筆）

「原田はみずから死を早めた。残念でならないと同時に、ぼくにはそのような原田にたいする怒りがこみあげてくる。原田はあまりにも自分を、自分の肉体を粗末にしすぎた。ぼくら周囲の友人たちは、前から彼にお医者さんに診てもらっておくように、いくどか注意した。とくに医学者でもある加藤周一がそばにいて身近かに警告していたにもかかわらず、原田はどうしても診断をききいれなかった。／原田の人格はまことにりっぱであり、偉大だった。ぼくらはみな原田を愛していた。深く強く愛していたからこそ、ぼくらは原田の理屈にならぬそのような頑固な自分にたいする粗末さをいきどおっているのだ。」[5]

→中村真一郎

「そうした彼が、若くして世を去ると、友人一同の葬儀委員長を引き受けたと日頃（ひごろ）言っていた彼に先立たれた私たちは、閉口してしまった。理想主義者たる福永や加藤が、純粋な悲しみにひたっているなかで、私は目くばりのきく篠田一士[6]と共に、独文関係の人たちと協調しながら、円満に葬式をおえるために、俗事にまみれて旧友たちの軽蔑（けいべつ）を買った。しかし私は、原田が生きていたら、必ずした

[5] 白井健三郎「原田義人を悼む――やさしく暖かく繊細なそれでいて歯ぎしりしながら自分を煮つめていた」（『日本読書新聞』1960 年 8 月 8 日号）4 面。

[6] なお、篠田一士（1927～89 年）の原田に対する追悼文もある。篠田「原田さんの遺著について一言」（『學鐙』1961 年 7 月号）。

に相違ない、数々の世間的配慮を、大学やジャーナリズムや親戚に対して、彼に代わってやっているつもりだったのである。その間に、福永は出棺の際の送葬曲の選定に、心をくだいていた。そちらの方が、余程、高級なのは当たり前である。」[7]

→加藤は原田の死に際し、最も気心が知れたはずの友人たちの考えていることが急に理解できなくなったという。以降、回想の形式で加藤にとっての原田の死の意味が綴られる

第 2 段落

死んだ男――私は彼をほんとうに識っていたのだろうか。「身体の調子が悪い」という話を聞いたときに、私は電話で彼の様子を確めようと思った。しばらく会っていなかったし、彼の家を訪ねたことは年来絶えてなかった。その頃の私は、多くの雑誌に、多くの約束をしていて、絶えず仕事に追われながら、あたかも多忙が生きていることの証拠であるかのように暮していた。電話口で私は彼の具合を訊ねた。「いや、何でもない」と彼は気軽にいい、少し神経質な声でつけ加えた、「しかし誰からそんな話を聞いたの？」「誰から聞いても、そんなことは問題じゃないよ」と私はいった、「それより君の身体のことを話してくれ給え。どういう風に具合がわるいのか」「なに胃が少し痛むだけだ、いつものように。こういうことは、まえから度々あってね……」「明日君の家に行きたいと思うが、どうだろう」「それには及ばないさ、大丈夫だ」「会って話した方がいいよ」「ほんとうに何でもないのだ」「何でもないということを確めておいてもいいじゃないか」「君が忙しいということは解っているし……」「忙しくはないさ」と私はいった、「久しぶりで君に会って、ゆっくり話ができないほど、忙しくはない」。私は翌日の午後彼の家を訪ねるといい、その返事を待たずに電話を切った。(198 頁、改 225～226 頁)

(1)「死んだ男――私は彼をほんとうに識っていたのだろうか」

→本章では生前の原田をめぐる回想を通じて、加藤のこの疑問が深められる。また本章には、前章を含め友人といった親しい他者であっても、真に理解することは可能なのかという問題も通底しているといえる

(2)「その頃の私は、多くの雑誌に、多くの約束をしていて、絶えず仕事に追われながら、あたかも多忙が生きていることの証拠であるかのように暮していた。」

→医業を廃した後の 1960 年頃の加藤の「売文業」は、多忙を極めていた。1960 年に加藤が抱えていた連載には、『朝日ジャーナル』の「東京日記――外国の友へ」(1960 年 1 月 3 日～7 月 31 日)、『世界』の「物と人間と社会」(1960 年 6 月～61 年 1 月、未完)、『毎日新聞』の「今月の論調」(1959 年 3 月 17 日～1960 年 8 月 30 日）がある。著書として『東京日記』(朝日新聞社、9 月)、『二つの極の間で』(弘文堂、9 月）を刊行している

→60 年安保闘争もこの傾向に拍車をかけた。加藤は岩波書店主宰の平和問題談話会の流れを汲む国際問題談話会（1959 年 5 月～68 年 2 月）に加わり、安保条約改定反対の論陣を張る。国際問題談話会は共同討議「政府の安保改定構想を批判する」(『世界』1959 年 10 月号)、「ふたたび安保改定について」(『世界』1960 年 2 月号）を発表[8]

---

[7] 中村前掲「自伝抄　わが点鬼簿＜9＞」5 面。

[8] 都築勉『戦後日本の知識人――丸山眞男とその時代』(世織書房、1995 年）301～305 頁。

→原田は加藤の多忙を気遣うも、加藤は原田の身体を心配し久しぶりにその自宅を訪問する

第 3 段落

中央線の駅まえの広場は、しばらく時をおいて、私が行く度に変っていた。新しい店ができ、大きな建物の工事が進み、乗合自動車の停留所が右から左に移っていた。私は立どまり、うろ覚えの見当をつけ、往き交う人の肩が触れあうほどせまい商店街を通り抜けて、どれもこれも似たような平屋のならんでいる住宅街の方へ歩いた。そのなかの一軒が彼の住居であった。玄関には妻君が出て来て、「いつもお世話様になりまして」といった。思えば私が彼の世話になったことはおそらく十度、私が彼の世話をしたことは一度もなかった、と私は考えたが、だまっていた。彼はどてらを着て、顔色がいくらか青ざめてみえた。しかしその長い髪も、特有の微笑も常に変らなかった。病気の話はしたがらなかったが、私が固執すると、淡々と他人ごとのように喋った。話を聞いただけでも、事態の容易でないことはあきらかであった。「いくら申しても、医者に行かないのでございますよ」と私の方をみながら妻君はいった。「お茶をいれてきて下さい」と彼は妻君にいう。「ほんとに頑固で……」といいながらも、妻君は別の部屋へ起って行った。「どうだ、一寸、診ようか」と私は努めてさりげない様子を粧いながら、きり出した。しかし彼は、言葉の調子に乗って来るような男ではなかった。顔色を変えず、しかしはっきりと、「それには及ばぬだろう」と彼はいった、「それより別の話をしよう。久しぶりではないか」。私はいい張った。病気の話を聞いた以上、診ておいた方がよいと思う、診た上で今後どうしたらよいかを決めよう、話を聞いただけで見当をつけるのは中途半端である……。そういいながら、私はもしかすると彼の病が手おくれではないか、と考えていたが、診察したあとでは、その疑いがいよいよ濃くなった。「心配なことはないね。しかし……」と私はいった、「設備の充分な病院で検査し、診断を確実にする必要がある。ながくはかからぬから、入院した方がよい。外来検査では無理だ……」。私の頑固さにいくらか呆れたという風で、彼は入院を承諾した。しかしさしあたり仕事が山積していて、学校にも責任があるから、それを片づけた上で「来週の末になったら、万事君のいう通りにしよう」といった。「いや、できるだけ早い方がよいと思う」「ぼくも子供じゃないよ」とそのとき彼は話をうち切るように鋭くいった。「病気のことは任せたまえ」と私も怒鳴った。「ぼくは医者だ」「しかしぼくの身体だから……」「君に仕事や責任のあることを考えずに、早い方がよいといっているわけではないぜ。その位のことは、考えた上で、早い方がよいと思うのだ。できれば明日だ」。彼はその翌日入院した。（198～200 頁、改 226～227 頁）

(1)「玄関には妻君が出て来て、「いつもお世話様になりまして」といった。思えば私が彼の世話になったことはおそらく十度、私が彼の世話をしたことは一度もなかった、と私は考えたが、だまっていた。」

→「それより別の話をしよう。久しぶりではないか」との発言にも窺えるように、本章では何度も原田の加藤ら友人たちに対するきめ細やかな心遣いが強調される。その反面として、この他者への熱心な奉仕が原田から自身にとって本質的な仕事に取りかかることを遠ざけた

→中村真一郎

「現に、彼がドイツ留学と決まり、その歓送会の席上に、私の妻に陣痛のはじまった報知が齎(もた)らされると、自分が主人役の会をほうり出して、病院へ駆けつけて来ようとし、亭主の私の諫止(かんし)によって、ようやく思いとどまったくらいである。」「しかし、そうした人々の悲しみを見るにつけ、私は原田があんなに広い人々に哀悼の念を起こさせているのは、生前の彼が時間の多くを他人のためにばかり

使った結果ではないのかと、次第に怒りが生じてくるのをとどめられなくなった。／彼にはもっとエゴイスチックに、彼本来の仕事に没頭してほしかった。私たちの世話などしてくれなくてもよかったのである。」[9]

→中村光夫（1911～88 年）

「〔……〕そのとき一番感じたのは、彼が稀に見る洗練された話し手であることです。少人数のなかでも、自分をおしつけることを潔癖に警戒し、ひとの気持を敏感に察して、手綱を充分しめながら、しかも相手に迎合したりせず、自分の云ひたいことはちやんと云ふ風でした。ただ彼の場合は、自我と社交性が表裏一体になつてゐながら、自分を主張するのも、それが一番相手を退屈させない手段だからといふやうなところがあつて、奉仕の気持の過剰が、ときにはお世辞に近いやうな言葉を口にさせることがありますが、そこに計算の卑しさがなく、敏感すぎる気持で思はずした失言といつた感じなので、僕等は気持よくそれにのせられます。」[10]

→長谷川泉（1918～2004 年）

「原田は一高時代から周囲に敵を作らない、きわめて奉仕的精神に富んだ男であった。彼の一見ひよわそうな、きゃしゃな、そして実は芯の強い身体を支えた生命は燃焼し尽きてしまったが、彼の常に微笑をたたえた叡智のまなざしと誰にも愛される風貌姿勢は、永久に消えないおもかげを残している。」「頼まれればいやとは言わないで、いろいろな仕事をした。実力があり、かつ人格もよく、そして奉仕精神に富んでいるから、必要以上にジャーナリズムに動かされ過ぎたところもあったようだ。」[11]

(2)「しかしその長い髪も、特有の微笑も常に変らなかった。」

→中村光夫も原田の印象について、「浅黒い顔、横にわけた長目の髪、独得の複雑な微笑」[12]と述べている。「長い髪」と「特有の微笑」は衆目の一致する原田のチャームポイントだったのだろう

(3) 体調不良を訴えているにもかかわらず、「それには及ばぬだろう」「ぼくも子供じゃないよ」「しかしぼくの身体だから……」と頑なに医者にかかろうとしない原田に対し、時に激しながら入院を強くすすめる加藤

→ここには「京都の庭」（『続羊の歌』）で描かれた、医師として自身の母を救えなかった加藤の痛恨の思いも関係しているかもしれない

(4)「彼はその翌日入院した。」

→原田がようやく入院したのは、1960 年 6 月 19 日であった

「「六月十九日入院してから死ぬ三日前までの四十日間苦しみ通しでした」〔……〕七月十四日以後は食事はおろか薬さえのめなくなった体に、間断なく嘔き気が襲う。病床につきそう夫人が顔をそむけたくなるほどの苦痛の連続だったという。／多忙だった。仕事に追われた日常、とりわけ今年の三、

---

[9] 中村前掲「自伝抄　わが点鬼簿＜9＞」5 面。

[10] 中村光夫「原田義人を悼む」（『聲』9 号、1960 年 10 月）126 頁。

[11] 長谷川泉「編集デスク 2　原田義人の死」（『看護教育』1 巻 2 号、1960 年 12 月）25 頁。

[12] 中村前掲「原田義人を悼む」125 頁。

四、五月はひどかった。三十分位しか眠らない日が何度もつづいた。〆切の約束を破ったことのない氏が、延期を申し出るようになった。胆嚢炎と思いこんでいた病気の治療も、この仕事が終ったら、あれが片付いたらと一日のばしにしていたことが、とりかえしのつかぬ結果を招いてしまったようだ。」[13]

第 4 段落

病院の廊下で、見舞いの友だちが何人か出会ったときに、カトリック信者であった一人が、もし不治の病であるならば、そのことを当人に知らせた方がよくはないだろうか、といい出した。居合せた誰もが反対したが、私にはそのことの当否についてはっきりした意見がなかった。もし友人の言葉を、証拠なしに、信ずることができないとしたら、友人とは一体何だろうか。私の言葉を疑わずに信じるだろう男のまえで、嘘をつくことは私にはむずかしい。たとえそれが彼を力づけ、救うためであったとしても。しかもそのとき、彼を救うみちは全く失われていた。診断に疑の余地はなかったし、診断が正しければ希望のあるはずがなかった。病室の彼はいった、「こんなに痩せたよ」。その声は弱かったが、いつものように彼は自分のことよりも、周囲に気をつかっていた、「今度はみんなに世話をかけた、忙しいのに。起きられるようになったら、働かなければならない……」。私には彼が「決して起きられるようにならぬだろう」ということはできなかった。(200～201 頁、改 227～228 頁)

(1)「居合せた誰もが反対したが、私にはそのことの当否についてはっきりした意見がなかった。」
→加藤は「私の言葉を疑わずに信じるだろう男のまえで、嘘をつくことは私にはむずかしい」という思いを抱きながらも、しかし原田を前にして「決して起きられるようにならぬだろう」と本当のことを言うことはできなかった

(2)「病室の彼はいった、「こんなに痩せたよ」。その声は弱かったが、いつものように彼は自分のことよりも、周囲に気をつかっていた、「今度はみんなに世話をかけた、忙しいのに。起きられるようになったら、働かなければならない……」」
→病床にありながらも、友人たちへの気遣いを決して忘れない原田の姿
→白井健三郎
「「痛いんじゃない。苦痛、苦難……受難だな……」、病室で原田はぼくに言った。原田が心底からの苦難のことばを口にだしたのは、こんどがはじめだった。／「聖セバスチャンの受難みたいだな。もっともおれの顔は、そんなりっぱなものじゃないがね…」。度がすぎるほどこまかく気を使う原田は、こんなことばを言うなかで、看護婦さんにたいする心づかいをあれこれ奥さんにあたえていた。」[14]

第 5 段落

亡くなってからしばらくして、私はしばしば、彼がみずから死を望んでいたのではなかったか、と考えるようになった。それは自殺という意味ではない。私は病院の主治医と相談して、病人に病名をかくし、かくし了せたと思っていたし、彼には、あらためて仕事をはじめたいという望みが強いようだと思って

[13] 「とびっくコーナー　原田義人氏　誰からも親しまれ、慕われた人」(『図書新聞』1960 年 8 月 13 日号)。
[14] 白井前掲「原田義人を悼む」4 面。

いた。しかし彼がそういうことを口にしていたのは、彼の生きることを望んでいた私たちへの、一種の心遣いであったのかもしれない。私は、彼がすでに早く死病を感づいていて、その手おくれになることをひそかに待っていたのではないかという疑をみずから否定することができない。たまたま病が襲って来たときに死の覚悟をしていたわけではないだろう。しかし半ばは死を怖れ、半ばは死を望んでいたのかもしれない。それより早く私は彼がこういうのを聞いたことがある。「ぼくのような人間でも、死にたいと思えば、死ぬ権利だけはあるだろう、他のことには権利がないとしても」。そういうときの彼の声は、沈んでいるというよりも、むしろ激しく投げやりにきこえた。「他のこと」とは、どういうことであったのか。私は敢えてそれを訊かなかった。話せることならば、訊くまでもなく彼の方から話していただろう。彼はそれ以上何もいわなかった。つき合うこと二十年、そのときに私は、彼の大きな部分は、私の理解の外にあると思った。(201 頁、改 228～229 頁)

(1)「亡くなってからしばらくして、私はしばしば、彼がみずから死を望んでいたのではなかったか、と考えるようになった。」

→加藤は、原田が「あらためて仕事をはじめたいという望み」を強く持っていたと思っていたが、そのような原田の発言も他者への配慮を優先するその性格を踏まえれば、実は「彼の生きることを望んでいた私たちへの、一種の心遣いであったのかもしれない」と考えるようになる

→「私は、彼がすでに早く死病を感づいていて、その手おくれになることをひそかに待っていたのではないかという疑をみずから否定することができない」。この推測は、生前の原田の「激しく投げやり」に聞こえた「ぼくのような人間でも、死にたいと思えば、死ぬ権利だけはあるだろう、他のことには権利がないとしても」という意味深長な発言からも裏付けられた

→「「他のこと」とは、どういうことであったのか」。加藤が知らない友人原田の抱えていた葛藤や苦悩が示唆される

(2)「つき合うこと二十年、そのときに私は、彼の大きな部分は、私の理解の外にあると思った」

→原田をモデルとする上條慎吾の死をめぐる、福永武彦の小説「告別」(1962 年 1 月) でも本章と同様の疑問が描かれている (なお、「告別」では本章第 8～10 段落における原田と欧洲で出会ったひとりの女性との関係についても綴られる)

「上條だって、一つの仕事の途中だからといって、仕事がそれ一つで終る筈もないし、身体が大事だという理屈ぐらいは分っていた筈だ。とすれば、……そこで私は、ひょっとしたら彼はいつからか生きようという気力をなくしてしまったのではないかと、思い当った。いつからだろうか、そしてなぜだろうか。私は上條慎吾について殆ど何も知らなかったことを、いな一般に人は他人について常に殆どその生活の実態を知らないことを、この時再びしみじみと感じた。」[15]

→「加藤は生涯にわたって「みずから死を望む」ということを経験したことがなかったろう。「できること」と「できないこと」を峻別し、できないことにまで責任を負う、あるいは無限に責任を負うという考え方は加藤にはない。加藤には豊かな知的好奇心があり、「世界を理解したい」という溢れんばかりの欲求は、死への欲求が入りこむ余地さえ与えなかった。」[16]

---

[15] 福永武彦『告別』(講談社文芸文庫、1990 年) 45 頁。

[16] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』(岩波書店、2018 年) 462 頁。

第 6・7 段落

しかし二人の人間が解り合うとは、どういうことだろうか。「気分」は通じることがある。しかし「気分」は当人にも予測することのできない変転して極りのないものだ。つまるところ仕事と仕事のなかにあらわれたその人を除けば、一体何を理解したといえるのだろうか。

私たちは二十年、ある意味で、同じ道を歩んできた。絶えず自分自身以外のものであろうとし、世界（と他人）を理解しようとし、それぞれ視野を拡大しながら、もの事の間に関連をもとめようとしてきた。そういう道を、私はその場の感想を書き散らしながら、彼は主として感想を自分自身の裡につつみこみながら、通ってきた。しかしそのちがいは大きなことではない。仕事は、真にその名に値するものを、彼もしなかったが、私もやりとげなかった。しかしその頃の私は、道がようやく曲り角にさしかかっているということを感じていないわけではなかった。多くのもの事の間に一種の関連がみえはじめ、そのことが自分自身の立場の自覚とつながり、何処にいても従って何をしていても、自分が自分自身であることに変りがないと思うようになりはじめていた。仕事らしい仕事をするとすれば、これからだという気がしたし、それは私だけのことではなく、彼の場合にも同じことであるはずであった。そのとき病に倒れるほど、無残なことがあるだろうか。将来するかもしれない仕事が何であるかを私は知らなかったが、それが何であるにしても、彼の仕事の質を信じていたのだ。どういう仕事の準備もしていなかった男、あるいは何らかの仕事をなしとげた男が死ぬのではない。仕事の準備を漸く終った男がその仕事をはじめるまえに死ぬのである。（201～202 頁、改 229～230 頁）

(1)「私たちは二十年、ある意味で、同じ道を歩んできた。」

→加藤はここでその「仕事」を通じて原田を理解しようとし、自身と原田を重ね合わせながらそこに共通の歩みを見出そうとする

→加藤と原田とは、これまで「絶えず自分自身以外のものであろうとし、世界（と他人）を理解しようとし、それぞれ視野を拡大しながら、もの事の間に関連をもとめようとしてきた」。『続羊の歌』ではこの過程が描かれてきたといえる。この「同じ道」を加藤は「その場の感想を書き散らしながら」、一方の原田は「主として感想を自分自身の裡につつみこみながら、通ってきた」

→しかし、加藤も原田もいまだ真の「仕事」をやり遂げていない。加藤はこの道が「曲り角」に来ていることを自覚する。「多くのもの事の間に一種の関連がみえはじめ、そのことが自分自身の立場の自覚とつながり、何処にいても従って何をしていても、自分が自分自身であることに変りがないと思うようになりはじめていた。仕事らしい仕事をするとすれば、これからだという気がした」。一方の原田も同様であったはずである。「そのとき病に倒れるほど、無残なことがあるだろうか」

(2)「多くのもの事の間に一種の関連がみえはじめ、そのことが自分自身の立場の自覚とつながり、何処にいても従って何をしていても、自分が自分自身であることに変りがない」

→これまで関心を向けてきた様々な事象には実は「関連」があった。それは加藤にとって、現在の日本社会とも連続する、日本の文化・思想の歴史の全体に関わる追究すべき問題の焦点が定まってきたことを意味するだろう

「その後、今日まで、私は、竹内好や安保条約や源氏物語絵巻について書き、日本の近代思想史やヨーロッパの現代思潮ということについても書き、また大学の教室で、「正法眼蔵」や「狂雲集」のことを喋った。そういう話題は、外からもとめられたのではなく、それぞれの機会にみずから択んだの

であり、私にとっては互いに関連のないものではなかった。はじめからはっきりしていたのではなく、次第に私自身にみえて来るようになった一種の関連……しかしそれはもっと後になってからの話である。」(「格物致知」『続羊の歌』改 210 頁)

→1960 年前後は、加藤の「主著」といえる 1970 年代の『日本文学史序説』に繋がる重要な論文が発表されている。「戦争と知識人」(『近代日本思想史講座 4　知識人の生成と役割』筑摩書房、1959 年 9 月)、「親鸞――一三世紀思想の一面」(『日本文化研究第 8 巻』新潮社、1960 年 7 月)

→原田義人「加藤周一における西洋と日本」(1959 年 7 月執筆)

「加藤周一が日本の古い文化を探ろうとするのは、回顧的な日本讃美に耽(ふけ)ろうとするのではない。かつてあつたものを取り出すのではなく、現在もあるものを見出そうとするのである。日本文化の雑種性という独創的な考えかたは、これからの加藤の仕事の振幅をいよいよ拡げていくことであろう。〔……〕加藤周一のなかの西洋と日本とは、趣味の上から起こつた二つの異質なものへの分裂でもなければ、東西両文化の融合といつた空疎な観念でもない。創造の原理を求めようとする根本の欲求とつらなつている問題である。」[17]

(3) 原田の準備していた「仕事」

→中村真一郎

「原田が死んだ時、私と加藤周一とは話し合った。そして、原田が文学者としては自分の主題を発見しないうちに死んだという結論に達した。／原田は文学者としては、翻訳家であった。彼自身はしかし、他人の思想の伝達者では満足しきれなかったようである。彼は自分の仕事を夢想していた。〔……〕他日、何事か自分の名を冠するに価する仕事を実現する日があると信じていた。ただそれがどのような仕事か、自分にもはっきりとは見えていなかったようである。」[18]

→原田は生前、現代ドイツ文学を代表するフランツ・カフカ、ヘルマン・ブロッホ、ロベルト・ムージルについての研究書の刊行を企図していたという[19]

→加藤は、原田には「文学を通して、一個の精神的現象としての現代ドイツなるものを見きわめようとする意図」があったと指摘する。具体的にいえば、それは「ナチズムは偶発事ではなく、一個の歴史的産物であった。それは終わったのだろうか。しかしすべての歴史的な産物は、単に終わるものではなく、次に来たるものによって止揚されるほかないのではなかろうか。それならば、一体、戦後のドイツには何が起こったのか、また何が起こっているか」という問題であり[20]、加藤にとってこの問題に本格的に取り組むことが原田の真の「仕事」となるはずだった

---

[17] 原田義人「加藤周一における西洋と日本」(『新選現代日本文学全集　第 34』筑摩書房、1959 年) 415 頁。

[18] 中村前掲『戦後文学の回想』124 頁。

[19] 富士川英郎「あとがき」(原田前掲『反神話の季節』)。

[20] 加藤周一「本 批評と紹介　ほんものの世界――原田義人『反神話の季節』」(『朝日ジャーナル』1961 年 7 月 30 日号) 52 頁。